［成果情報名］温州ミカン施設栽培の改植園における早期多収と品質向上のための整枝法

［要約］「原口早生」の施設栽培改植樹で、３本主枝を斜め60度に誘引すると、着果後の収量が多い。その後徐々に主枝を直上に近づけることにより、果実糖度が向上する。

［キーワード］施設栽培、改植、誘引、収量、糖度

［担当］長崎果試・常緑果樹科

［連絡先］0957-55-8740　電子メールjiro@pref.nagasaki.lg.jp

［区分］果樹

［分類］指導

［背景・ねらい］

温州ミカンの施設栽培の樹齢進行と栽培の長期化により生産力が低下し、生産力を回復するため樹の更新が必要な園も多い。しかし、苗木からの改植更新では未収益期間が問題であり、短期間で収量の上がる樹に育成することが必要である。そこで、苗木からの改植による早期多収栽培技術を確立する。

［成果の内容・特徴］

１．定植後各区とも新しょう数は増加するが、収量は３カ年とも３本主枝、斜め誘引が多く、定植後４年目（2001年）に４t/10ａをこえる（表１）。

２．接ぎ木部径については、直上、斜め誘引区とも２本主枝の方が大きく、特に２本斜め誘引樹は樹容積が最も大きいが（表２）、主枝に競合する強勢な枝が地際部から数本発生し、夏季せん定時にせん除量が多くなり収量向上につながらない（データ省略）。

３．収穫時の果実糖度は、３本主枝直上誘引樹が３カ年とも最も高く、酸含量については差はみられない（表３）。

［成果の活用面・留意点］

１．11月中旬加温、６月収穫の早期出荷体系では、改植後４年目に収量４t/10ａ以上が可能であるが、原口早生の後期出荷の場合、夏季高温時の着色遅延、浮き皮果の発生により商品率低下が懸念される。

［具体的データ］
処理の概要
供試樹:「原口早生」
1997年10月に 2年生苗定植後 2年目に初着果
2.0m×2.0m、250本/10a植栽
３ヶ年とも11月中旬加温、6月収穫

表１　主枝数、誘引角度の違いと年次別新しょう数、収量の推移

処理区		新しょう数			収量		
主枝数	誘引角度	1999	2000 (本/樹)	2001	2000	2001 (kg/10a)	2002
３本	直上	124	170	426	2,525	3,725	4,075
３本	斜め[z]	97	206	429	2,650	4,300	4,425
２本	直上	97	145	370	1,850	3,500	3,625
２本	斜め	107	231	379	2,300	3,850	3,950

[z] 各主枝を約60度に誘引

表２　主枝数、誘引角度の違いと年次別枝径、樹容積の推移

処理区		接ぎ木部径			樹容積	
主枝数	誘引角度	2000	2001 (㎜)	2002	2001	2002 (㎥)
３本	直上	28.2	38.8	45.7	7.0	8.5
３本	斜め	23.0	41.6	51.0	7.5	8.2
２本	直上	29.3	40.1	54.8	7.4	8.3
２本	斜め	27.1	44.7	56.0	8.9	9.3

表３　主枝数、誘引角度の違いと年次別果実品質の推移

処理区		糖度				酸含量			
主枝数	誘引角度	2000	2001	2002	平均 (有意差[z])	2000	2001 (g/100□)	2002	平均
３本	直上	12.9	12.2	12.4	12.5	0.82	0.90	0.85	0.86
３本	斜め	12.2	11.9	12.2	12.1 (*)	0.90	0.97	0.82	0.90
２本	直上	12.1	11.5	11.8	11.8 (**)	0.90	0.90	0.81	0.87
２本	斜め	12.4	11.4	12.1	12.0 (**)	0.96	0.90	0.83	0.90

[z] ３本直上誘引処理区との差　**:１%、*:５%

［その他］
研究課題名：温州ミカンの施設栽培における改植園の早期多収栽培技術の確立
予算区分：県単
研究期間：1999～2003年度
研究担当者：山下次郎
発表論文等：